

# 銀河鉄道 の夜

宮 沢 賢 治

# 目次

一、	午后の授業	5
二、	活版所	7
三、	家	8
四、	ケンタウル祭の夜	9
五、	天気輪の柱	12
六、	銀河ステーション	13
七、	北十字とプリオシン海岸	16
八、	鳥を捕る人	20
九、	ジヨバンニの切符	24

## 一、午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなどころを指しながら、みんなに問をかけました。

カムパネラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちです。ところが先生は早くもそれを見附けたので

した。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすくすわらいました。ジョバンニはもうどきまぎしてまっ赤になつてしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困つたようすでしたが、眼をカムパネラの方へ向けて、

「ではカムパネラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネラ

ラが、やはりもじもじ立ち上つたままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネラを見ていましたが、急いで「ではよし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんさうでしょう。」

ジョバンニはまっ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙がいつぱいになりました。そうだ僕は知つていたのだ、勿論カムパネラも知つている、それはいつかカムパネラのお父さんの博士のうちでカムパネラといつしよに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。それどこでなくカムパネラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋から巨きな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒な買いつ

ばいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなとはきはぎ遊ばず、カムパネルラともあまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がつてわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた云いました。

「ですからもしこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもっと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにう

かんでいる脂油の球にもあたるのです。そんな何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光のある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでいるのです。つまりは私も天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えましたが、白くぼんやり見えるのです。この模型を「ごらんなさい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあって地球がそのすぐ近くにあるとします。みな

さんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こつちの方はレンズが薄いののでわずかの光る粒即ち星しか見えないのでしょうか。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

そして教室中はしばらく机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいっぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

## 二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところが集まっていました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろ仕度をしているのです。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲つてある大きな活版所にはいつてすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴をぬいで上りますと、突き当りの大きな扉をあけました。中に

はまだ昼なのに電燈がついてたくさんさんの輪転器がばたりばたりとまわり、きれて頭をしばつたりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いて居りました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子に座った人の所へ行つておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾つて行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向うの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしゃがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらいました。

ジョバンニは何べんも眼を拭いながら活字をだんだんひろいました。

六時がうつつしばらくたつたころ、ジョバンニは拾つた活字をいっぱいに入れた平たい箱をもういちど手にもつた紙きれと引き合せから、さつきの卓子の人へ持つて来ました。その人は黙つてそれを受け取つて微かにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをする扉をあけてさつきの計算台のところに来ました。するとさつきの白服を着た人がやつぱりだまつて小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると台の下に置いた靴をもつてもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

### 三、家

ジョバンニが勢よく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に繋いろのケールやアスパラガスが植えてあって小さな二つの窓には日覆いが下りたままになっていました。

「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの。」ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったらう。今日は涼しくてね。わたしはずうっと工合がいいよ。」

ジョバンニは玄関を上って行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被って寝んでいたのです。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って。」

「ああ、お前さんにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」

「ああ三時ごろ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

「来なかったらうかねえ。」

「ぼく行ってとって来よう。」

「あああたしはゆっくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行ったよ。」

「ではぼくたべよう。」

ジョバンニは窓のところからトマトの皿をとってパンといっしょにしばらくむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間も

なく帰ってくると思うよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の漁は大へんよかったと書いてあったよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした筈がないんだ。」

この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がわかるがわる教室へ持つて行くよ。一昨年修学旅行で（以下数文字空白

白）

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひや

かすように云うんだ。」

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムバネルラなんか決して云わない。カムバネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちようどおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

「あだからお父さんはぼくをつれてカムバネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムバネルラのうちに寄った。カムバネルラのうちにはアルコールラムブで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなるとき石油をつかったら、罐がすっかり煤けたよ。」

「そうかねえ。」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。しっぽがまるで幕のようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角までついてくる。」

「きつと犬もついて行くよ。」

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「ああ行っておいで。川へははいらないでね。」

「ああぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行ってくるよ。」

「もっと遊んでおいで。カムバネルラさんと一緒に心配はないから。」

「ああきつと一緒だよ。お母さん、窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね。」

「ジョバンニは立って窓をしめお皿やパンの袋を片附けると勢よく靴をはいて」

「では一時間半で帰ってくるよ。」と云いながら暗い戸口を出ました。

#### 四、ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、櫓のまつ黒にからだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニが、どんだん電燈の方へ下りて行きますと、いままではけものように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジョバンニの影ぼうしは、だんだん濃く黒くはつきりなって、足をあげたり

手を振ったり、ジョバンニの横の方へまわって来るのでした。

（ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す。そうら、こんどはぼくの影法師はコムバスだ。あんなにくるつとまわって、前の方へ来た。）

とジョバンニが思いながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新しいえりの尖ったシャツを着て電燈の向う側の暗い小路から出て来て、ひらっとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまだそう云ってしまわないうちに、「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぱっと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家の中へはいってしまいました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはまるで鼠のようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯や木の枝で、すっかりきれいに飾られた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼が、くるくるつとつごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の盤に載って星のようにゆっくり循環したり、また向う側から、銅の人馬がゆっくりこちへまわって来たりするのでした。そのまん中に円い黒い星

座早見が青いアスバラガスの葉で飾ってありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはうつつと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形のなかにめぐってあらわれるようになって居りやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼくとけむったような帯になってその下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげているように見えるのでした。またそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立っていましたいしばんうしろの壁には空じゅうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかっていました。ほんとうにこんなような蠅だの勇士だのそらにぎっしり居るだろうか、ああ



ぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立って居ました。

それから俄かにお母さんの牛乳のことを思ひだしてジョバンニはその店をはなれました。そしてきゆうくつな上着の肩を気にしながらそれでもわざと胸を張って大きく手を振って町を通って行きました。

空気は澄みきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまっ青なもみや橘の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタナスの木などは、中に沢山の豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのです。子どもらは、みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

「ケンタウルス、露をふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいるのです。けれ

どもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすくらしい台所の前に立って、ジョバンニは帽子をぬいで「今晚は」と云いましたら、家の中はしいんとして誰も居たようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立つてまた叫びました。するとしばらくたつてから、年老った女の人が、どこか工合が悪いようにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云いました。

「あの、今日、牛乳が僕んどこへ来なかつたので、貰いにあがつたんです。」ジョバンニが生けん命勢よく云いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のとこを擦りながら、ジョバンニを見おろして云いました。

「おっかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少したつてから来てください。」その人はもう行つてしまひそうでした。

「そうですか。ではありがとう。」ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雜貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑つたりして、めいめい烏瓜の燈火を持ってやつて来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思わずどきつとして戻ろうとしましたが、思

い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジョバンニが云おうとして、少しのどがつまつたように思ったとき、

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニはまっ赤になって、もう歩いていくかもわからず、急いで行きすぎようと思いましたら、そのなかにカムバネルラが居たのです。カムバネルラは気の毒そうに、だまって少しわらって、怒らないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

ジョバンニは、逃げるようにその眼を避け、そしてカムバネルラのせいの高いかたが過ぎて行って間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかえ

って見ましたら、ザネリがやはりふりかえって見ていました。そしてカムバネルラもまた、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行ってしまったのです。ジョバンニは、なんとも云えずさびしくなって、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてて、わああと云いながら片足でびよんびよん跳んでいた小さな子供らは、ジョバンニが面白くてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジョバンニは黒い丘の方へ急ぎました。

## 五、天気輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く運つて見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さ

な林のこみちを、どんどのぼって行きました。まっくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしたされてあつたのです。草の中には、びかびか青ばかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、ジョバンニは、さっきみんなの持つて行つた烏瓜のあかりのようだとも思いました。

そのまっ黒な、松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘っているのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのです。つりがねそうか野ざくかの花が、そこらいちめんに、夢の中からでも薫りだしたというように咲き、鳥が一足、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げま

した。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともし、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジョバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町はずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見え、その中にはたくさんさんの旅人が、苹果を剥いたり、中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風に行っていると考えますと、ジョバンニは、もう何とも云えずかなくなつて、また眼をそらに挙げました。あああの白いそらの帯がみんな星だといふぞ。

ところがいくら見ている、そのそらはひる先生の云つたような、がらんとした冷いと

こだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やらある野原のように考えられて仕方なかつたのです。そしてジョバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引つ込んだりして、とうとう輩のように長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまぢまでがやっぱりぼんやりしたたくさんの星の集りか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

## 六、銀河ステーション

そしてジョバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になつて、しばらく蛍のように、べかべか消えたりとまつたりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼青のそらの野原にたちま

した。いま新しく灼いたばかりの青い鋼の板のような、そらの野原に、まっすぐにすきつと立つたのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云う声がかしたと思うといきなり眼の前が、ぱつと明るくなって、まるで億万の蛍烏賊の火を一べんに化石させて、そら中に沈めたという工合、またダイアモンド会社で、ねだんがやすくなるために、わざと獲れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひつくりかえて、ばら撒いたという風に、眼の前がさあつと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦ってしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごことごとこと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄色の電燈のならんだ車室に、窓から外を見な

がら座っていたのです。車室の中は、青い天  
蓋絨を張った腰掛けが、まるでがら明きで、  
向うの鼠いろのワニスを塗った壁には、真鍮  
の大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着  
を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出し  
て外を見ているのに気が付きました。そして  
そのこともの肩のあたりが、どうも見たこと  
のあるような気がして、そう思うと、もうど  
うしても誰だかわかりたくて、たまらなくな  
りました。いきなりこっちも窓から顔を出そ  
うとしたとき、俄かにその子供が頭を引込  
めて、こっちを見ました。

それはカムバネルラだったのです。

ジョバンニが、カムバネルラ、きみは前か  
らここに居たのと云おうと思つたとき、カム  
バネルラが

「みんなはねえいぶん走つたけれども遅れて

しまつたよ。ザネリもね、ずいぶん走つたけ  
れども追いつかなかつた。」と云いました。

ジョバンニは、(そうだ、ぼくたちはいま、  
いっしょにさそつて出掛けたのだ。)とおもひ  
ながら、

「どこかで待っていていようか」と云いました。  
するとカムバネルラは

「ザネリはもう帰つたよ。お父さんが迎いに  
きたんだ。」

カムバネルラは、なぜかそう云いながら、  
少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいとい  
ふうでした。するとジョバンニも、なんだか  
どこかに、何か忘れたものがあるというよう  
な、おかしい気持ちが生じた。まづ、いま  
した。

ところがカムバネルラは、窓から外をのぞ  
きながら、もうすっかり元気が直つて、勢よ  
く云いました。

「ああしまつた。ぼく、水筒を忘れてきた。

スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。

もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を

見るなら、ほんとうにすぎた。川の速くを飛

んでいたつて、ぼくはきつと見える。」そして、

カムバネルラは、円い板のようになった地図  
を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。

まったくその中に、白くあらわされた天の川  
の左の岸に沿つて一条の鉄道線路が、南へ南  
へとたどつて行くのです。そしてその地図  
の立派なことは、夜のようにまっ黒な盤の上  
に、一一の停車場や三角標、泉水や森が、青  
や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられて  
ありました。ジョバンニはなんだかその地図  
をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石ででき  
てるねえ。」

ジョバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通つたらうか。いまぼくたちの居るとこ、ここだろう。」

ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」

そちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすぎが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてこいて、波を立てているのです。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」  
ジョバンニは云いながら、まるでね上りたいくらい愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがつて、その天の川の水を、見きわめようとしたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどだんだん気をつけて見る

と、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおつて、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらつと光つたりしながら、声もなくどんとん流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、或いは三角形、或いは四辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光っているのです。ジョバンニは、まるでときどきして、頭をやけに振りまわした。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり願えたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た。」  
ジョバンニは云いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」

ジョバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云いました。

「アルコールか電気だろう。」カムバネルラが云いました。

「ことごとこと、その小さなきれいな汽車は、そのすすぎの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのです。」

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムバネルラが、窓の外を指さして云いました。

線路のへりになつたみじかい芝草の中に、月長石でも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」ジョバンニは胸を躍らせて云いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしま

つたから。」

カムパネルラが、そう云ってしまいかしまらないうち、次のりんどうの花が、いつばいに光って過ぎて行きました。

と思つたら、もう次から次から、たくさん  
のきいろな底をもつたりんどうの花のコップ  
が、湧くように、雨のように、眼の前を通り、  
三角標の列は、けむるように燃えるように、  
いよいよ光って立ったのです。

## 七、北十字とプリオシン海岸

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」

いきなり、カムパネルラが、思い切つたとうように、少しどもりながら、急ぎこんで云いました。

「ジョバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおっかさんは、あの  
速い一つのちりのように見える橙いろの三角  
標のあたりにいらっしやって、いまぼくのこ  
とを考えているんだつた。」）と思いながら、ぼ  
んやりしてだまっていました。

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸になる  
なら、どんなことでもする。けれども、いつ  
たいどんなことが、おっかさんのいちばんの  
幸なんだろう。」カムパネルラは、なんだか、  
泣きだしたいのを、一生けん命こらえている  
ようでした。

「きみのおっかさんは、なんにもひどいこと  
ないじゃないの。」ジョバンニはびっくりして  
叫びました。

「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほ  
んとうにいいことをしたら、いちばん幸なん  
だねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆる  
して下さると思う。」カムパネルラは、なに

かほんとうに決心しているように見えました。

俄かに、車のなかで、ぱつと白く明るくな  
りました。見ると、もうじつに、金剛石や草  
の露やあらゆる立派さをあつめたような、き  
らびやかな銀河の河床の上を水は声もなくか  
たちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼう  
つと青白く後光の射した一つの鳥が見えるの  
でした。その鳥の平らないただきに、立派な  
眼もさめるような、白い十字架がたつて、そ  
れはもう凍った北極の雪で錆たといつたら  
いか、すきつとした金いろの円光をいただい  
で、しずかに永久に立っているのです。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろか  
らも声が起りました。ふりかえって見ると、  
車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきも  
のひだを垂れ、黒いパイプを胸にあてた  
り、水晶の数珠をかけたたり、どの人もつま  
しく指を組み合せて、そつちに折っているの

でした。思わず二人もまっすぐに立ちあがり  
ました。カムバネララの類は、まるで熟した  
苹果のあかしのうつくしくかがやいて  
見えました。

そして鳥と十字架とは、だんだんうしろの  
方へうつて行きました。

向う岸も、青じろくぼうつと光ってけむり、  
時々、やっばりすすきが風にひるがえるらし  
く、さつとその銀いろがけむって、息でもか  
けたように見え、また、たくさんのりんどう  
の花が、草をかくれたり出たりするのは、や  
さしい狐火のように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との  
間は、すすきの列でさえざられ、白鳥の鳥は、  
二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じ  
きもうずうつと速く小さく、絵のようになっ  
てしまい、またすすきがざわざわ鳴って、と  
うとうすっかり見えなくなっていました。  
ジヨバン二のうしろには、いつから乗ってい

たのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカト  
リック風の尼さんが、まん円な緑の瞳を、じ  
つとまっすぐに落して、まだ何かこぼか声  
かが、そつちから伝わって来るのを、虔んで  
聞いているというように見えました。旅人た  
ちはしずかに席に戻り、二人も胸いっぱい  
かなしみに似た新しい気持ち、何気なく  
ちがった語で、そつと話し合つたのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりには着くんだよ。」

早くも、シグナルの緑の燈と、ぼんやり白  
い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それか  
ら硫黄のほのおのようなくらいばんやりした  
転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車  
はだんだんゆるやかに、間もなくブラ  
ットホームの前列の電燈が、うつしく規則  
正しくあらわれ、それがだんだん大きくなっ  
てひろがって、二人は丁度白鳥停車場の、大  
きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼か  
れたがねの二本の針が、くつきり十一時を  
指しました。みんなは、一べんに下りて、車  
室の中はがらんとなくなっていました。  
〔二十分停車〕と時計の下に書いてありまし  
た。

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジヨバン二  
が云いました。

「降りよう。」

二人は一度にはねあがつてドアを飛び出し  
て改札口へかけて行きました。ところが改札  
口には、明るい紫がかつた電燈が、一つ点い  
ているばかり、誰も居ませんでした。そこら  
中を見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もな  
かつたのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のように  
見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出  
ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐ  
に銀河の青光の中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行つたか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩をならべて行きますと、二人の影は、ちょうど四方に窓のある室の中の、二本の柱の影のように、また二つの車輪の輻のように幾本も幾本も四方へ出るのでした。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原に来ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のように云つていたのでした。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そっだ。」どこでぼくは、そんなこと習つたろうと思ひながら、ジョバンニもぼんやり答えていました。

河原の礫は、みんなすきとおつて、たしかに水晶や黄玉や、またくしゃくしゃの皺曲を

あらわしたのや、また稜から霧のような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジョバンニは、走つてその者に行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりもっとすきとおつていたのです。それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたのでわかりました。川上の方を見ると、すすきのいっばいに生えている崖の下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿つて出ているのでした。そこに小さな五六人の人かげが、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカッと光つたりしました。

「行つてみよう。」二人は、まるで一度に叫んで、そっちの方へ走りました。その白い岩になつた処の入口に、

「プリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立つて、向うの者には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまつて、岩から黒い細長いさきの尖つたくるみの実のようなものをひろいました。

「くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて来たんじゃない。岩の中に入つてるんだ。」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもないんでない。」

「早くあすこへ行つて見よう。きつと何か掘つてるから。」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさつきの方へ近づいて行きます



た。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけてながら、鶴嘴をふりあげたり、スコップをつかったりしている、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

「そのその突起を壊さないように。スコップを使ったまえ、スコップを。おっと、もう少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたという風になって、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて見ると、そこには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四

角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡をきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あったらう。それはまあ、ざつと百二十年ぐらい前のくるみだよ。ごく新しい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そつくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといつてね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。ていねいに鑿でやつてくれたまえ。ボスといつてね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年以上前にできたという証拠もいろいろあが

るけれども、ぼくらとちがったやつからみるとやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空か見えやしないかということなのだ。わかたたい。けれども、おいおい。それもスコップではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈じゃないか。」大学士はあわてて走り去りました。

「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図と腕時計とをくらべながら云いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジヨバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら。」大学士は、また忙がしそうに、あちこち歩きまわって監督をはじめました。二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれぬように走りました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝もあつくありませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界中だつてかけられると、ジョバンニは思いました。そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、間もなく二人は、もとの車室の席に座って、いま行つて来た方を、窓から見っていました。

## 八、鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾でつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛けた、赤髭のせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげ

の中でかすかに微笑いながら荷物をゆっくり網棚にのせました。ジョバンニは、なにか大へんさびしいようなかなしいような気がして、だまって正面の時計を見ましたら、ずうっと前の方で、硝子の笛のようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていたのです。カムパネラは、車室の天井を、あちこち見っていました。その一つのあかりに黒い甲虫がとまってその影が大きく天井にうつっていたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジョバンニやカムパネラのようなすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなって、すすきと川と、かわるがわる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおすおすしながら、二人に訊きました。

「あなた方は、どちらへいらっしゃるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジョバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまでも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネラが、いきなり、喧嘩のようにたずねましたので、ジョバンニは、思わずわらいました。すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人も、ちらっとこっちを見てわらいましたので、カムパネラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別に怒ったでもなく、頬をびくびくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。さきも白鳥もです。」  
「鶴はたくさんいますか。」

「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。」

「いいえ。」

「いまでも聞えるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴いてこらんなさい。」

二人は眼を挙げ、耳をすましました。「ごとと鳴る汽車のひびきと、すずきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞えて来るのでした。」

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」ジヨバン二は、どっちでもいいと思ひながら答えました。

「そいつはな、雑作ない。さぎというものはみんな天の川の砂が凝つて、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待つていて、鷺がみんな、脚をこういう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくつかないうちに、びたつ

と押えちまうんです。するともう鷺は、かたまって安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審もありませんや。そら。」その男は立つて、網柵から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです。」

「ほんとうに鷺だねえ。」二人は思はず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架のように光る鷺のからだだが、十ばかり、少しひらべたくなつて、黒い脚をちぢめて、浮彫のようにならんでいたのです。

「眼をつぶつてるね。」カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白い瞼つた眼にさわりました。頭の上の槍のような白い毛もちゃんとついていました。

「ね、そうでしょう。」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくりました。誰がいったいこらで鷺なんぞ喰べるだろうとジヨバン二は思ひながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日文があります。しかし雁の方が、もつと売れます。雁の方がずつと柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。

すると黄と青じろとまだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちょうどさっきの鷺のように、くちばしを揃えて、少し扁べたくなつて、ならんでいました。

「こつちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の

足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チヨコレートでもできてるように、すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべて、ごらん下さい。」鳥捕りは、それを二つにちぎってわたししました。ジヨバンニは、ちよっと喰べてみて、（なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チヨコレートよりも、もっとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかこれらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。）とおもいながら、やっぱりぼくぼくそれをたべていました。

「も少しおあがり下さい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニは、もつとたべたかったですけれども、

「ええ、ありがとう。」と云って遠慮しました

ら、鳥捕りは、こんどは向うの席の、鍵をもつた人に出しました。

「いや、商売ものを貰っちゃすみませんな。」

その人は、帽子をとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は。」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に間させるかって、あっちからもこっちからも、電話で故障が来ましたが、なかに、こつちがやるんじゃないやなくて、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのとこへ持って来たって仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将へやれて、斯う云ってやりましたがね、はっは。」

すすぎがなくなつたために、向うの野原か

ら、ぱつとあかりが射して来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルは、さつきから、訊こうと思つていたので、

「それはね、鷺を喰べるには、」鳥捕りは、こつちに向き直りました。

「天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、そうでなければ、砂に三四日うずめなければいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」やっぱりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルが、思い切つたというように、尋ねました。鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

「そうそう、こゝで降りなけあ。」と云いながら、立つて荷物をとつたと思うと、もう見えなくなつていました。

「どこへ行ったんだらう。」

二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑って、少し伸びあがるようにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光を出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立って、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそらを見ていたのです。

「あすこへ行つてゐる。ずいぶん奇体だねえ。きつとまた鳥をつかまえるよこだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおけるといいな。」と云つた途端、がらんとした枯梗いろの空から、さつき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いっばいに舞いおりに来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかつきり六十度に開いて立つて、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を

両手で片つ端から押えて、布の袋の中に入れてのでした。すると鷺は、蛍のように、袋の中でしばらく、青くべかべか光つたり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられないで無事に天の川の砂の上に降りるものの方が多かつたのです。それは見ていると、足が砂へつくや否や、まるで雪の融けるように、縮まって扁べつたくなって、間もなく熔釜炉から出た銅の汁のように、砂や砂利の上にはひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についているのでしたが、それも二三度明るくなつたり暗くなつたりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになつてしまふのでした。

鳥捕りは二十疋ばかり、袋に入れてしまふと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって、死ぬときのような形をしました。と思

つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、却つて、

「ああせいせいした。どうもからだに恰度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな。」というききおぼえのある声が、ジョバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうそこでとつて来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直してゐるのです。

「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか。」ジョバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気がして問いました。

「どうしてつて、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」

ジョバンニは、すぐ返事しようと思ひましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまつ赤にして何か思ひ

出そうとしているのです。

「ああ、速くからですね。」鳥捕りは、わか  
ったというように雑作なくうなずきました。

## 九、ジョバンニの切符

「もうここらは白鳥区のおしまいです。」こ  
んなさい。あれが名高いアルビレオの観測所  
です。」

窓の外の、まるで花火でいっばいのような、  
あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟  
ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼  
もさめるような、青宝玉と黄玉の大きな二つ  
のすきとおった球が、輪になつてしずかにく  
るくるとまわっていました。黄いろのがだん  
だん向うへまわつて行って、青い小さいのが  
こつちへ進んで来、間もなく二つののはじは、  
重なり合つて、きれいな緑いろの両面凸レン

ズのかたちをつくり、それもだんだん、ま  
んがふくらみ出して、とうとう青いろのは、す  
っかりトバースの正面に来ましたので、緑の  
中心と黄いろな明るい環とができました。そ  
れがまただんだん横へ外れて、前のレンズの  
形を逆に繰り返し、とうとうすつとはなれて、  
サファイアは向うへめぐり、黄いろのはこつ  
ちへ進み、また丁度さつきのような風になり  
ました。銀河の、かたちもなく音もない水に  
かこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、  
睡っているように、しずかによこたわつたの  
です。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も  
……。」鳥捕りが云いかけたとき、  
「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、  
赤い帽子をかぶつたせいの高い車掌が、いつ  
かまっすぐに立っていて云いました。鳥捕り  
は、だまつてかくしから、小さな紙きれを出

しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそ  
らして、「あなた方のは？」というように、指  
をうごかしながら、手をジョバンニたちの方  
へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困って、もじもじし  
ていましたら、カムバネルラは、わけもない  
という風で、小さな鼠いろの切符を出しまし  
た。ジョバンニは、すっかりあわててしまつ  
て、もしか上着のポケットにでも、入ってい  
たかとおもいながら、手を入れて見ましたら、  
何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。こ  
んなもの入っていたらうかと思つて、急いで  
出してみましたら、それは四つに折つたはが  
きぐらいの大きさの緑いろの紙でした。車掌  
が手を出しているもんですから何でも構わな  
い、やつちまえと思つて渡しましたら、車掌  
はまっすぐに立ち直つて丁寧にそれを開いて  
見ていました。そして読みながら上着のぼた

んやなんかしきりに直したりしていましたし  
燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていま  
したから、ジョバンニはたしかにあれは証明  
書か何かだったと考えて少し胸が熱くなるよ  
うな気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになったの  
ですか。」車掌がたずねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だと安心  
しながらジョバンニはそつちを見あげてくつ  
くつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字へ着きます  
のは、次の第三時ごろになります。」車掌は  
紙をジョバンニに渡して向うへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか  
待ち兼ねたというように急いでのでぎこみま  
した。ジョバンニも全く早く見たかったのだ  
です。ところがそれはいちめん黒い唐草のよう  
な模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷  
したものでだまって見ていると何だかその中

へ吸い込まれてしまうような気がするのだし  
た。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見  
てあわてたように云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつ  
はもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。  
天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける  
通行券です。こいつをお持ちになれば、なる  
ほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道  
なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あな  
た方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジョバンニが赤く  
なつて答えながらそれを又畳んでかくしに入  
れました。そしてきまりが悪いのでカムパネ  
ルラと二人、また窓の外をながめていました  
が、その鳥捕りの時々大したもんだというよ  
うにちらちらこつちを見ているのがほんやり  
わかりました。

「もうじき鷺の停車場だよ。」カムパネルラ  
が向う岸の、三つならんだ小さな青じろい三

角標と地図とを見較べて云いました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずに  
わかにとなりの鳥捕りが気の毒でたまらなく  
なりました。鷺をつかまえてせいせいしたと  
よるこんだり、白いきれでそれをくるくる包  
んだり、ひとの切符をびっくりしたように横  
目で見てもあわててはめだしたり、そんなこと  
を一一考えていると、もうその見ず知らずの  
鳥捕りのために、ジョバンニの持っているも  
のでも食べるものでもなんでもやっつけてしま  
いたい、もうこの人のほんとうの幸になるなら  
自分があの光る天の川の河原に立って百年つ  
づけて立って鳥をとってやっつてもいいという  
ような気がして、どうしてももう黙っていら  
れなくなりました。ほんとうにあなたのほし  
いものは一体何ですか、と訊こうとして、そ  
れではあんまり出し抜けだから、どうしよ  
うかと考えて振り返って見ましたら、そこには  
もうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚の上

には白い荷物も見えなかったのです。また窓の外で足をふんばつてそれを見上げて鷺を捕る支度をしているのかと思つて、急いでそつちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖つた帽子も見えませんでした。「あの人どこへ行つたらう。」カムバネルラもぼんやりそう云っていました。

「どこへ行つたらう。一体どこでまたあうのだらう。僕はどうしても少しあの人に物を言わなかつたらう。」

「ああ、僕もそう思っているよ。」

「僕はあの人が邪魔なような気がしたんだ。だから僕は大人づかい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで云つたこともないと思ひました。

「何だか苹果の匂がする。僕いま苹果のこと

考えたためだらうか。」カムバネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果の匂だよ。それから野茨の匂もする。」ジョバンニもそこを見ましたがやっぱりそれは窓からでも入つて来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジョバンニは思いました。

そしたら俄かにそこに、つやつやした黒い髪の毛の六つばかりの男の子が赤いジャケツのぼたんもかけずびどくびどくりしたような顔をしてがたがたふるえてはだして立っていました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれているけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ。」青年のうしろにもひとり十二ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が黒い外套を着

て青年の腕にすがつて不思議そうに窓の外を見ているのでした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカット州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されているのです。」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に云いました。けれどもなぜかまた額に深く皺を刻んで、それに大人づかたれているらしく、無理に笑いながら男の子をジョバンニのとなりに座らせました。

それから女の子にやさしくカムバネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへ座つて、きちんと両手を組み合せました。

「ぼくおねえさんのところへ行くんだよ。」



腰掛けたばかりの男の子は顔を憂にして燈台  
看守の向うの席に座ったばかりの青年に云い  
ました。青年は何とも云えず悲しそうな顔を  
して、じっとその子の、ちぢれてぬれた頭を  
見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあ  
ててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろ  
お仕事があるのです。けれどももうすぐあと  
からいらつしやいます。それよりも、おっか  
さんはどんなに永く待っていらつしやったで  
しょう。わたしの大事なタダシはいまどんな  
歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみん  
など手をつないでぐるぐるにわたこのやぶを  
まわってあそんでいるだろうかと考えたりほ  
んとうに待つて心配していらつしやるんです  
から、早く行つておっかさんにお目にかかり  
ましようね。」

「うん、だけども、船に乗らなければよかつた  
なあ。」

「ええ、けれど、こらんなさい、そら、どう  
です、あの立派な川、ね、あそこはあの夏中、  
ツインクル、ツインクル、リトル、スター  
をうたつてやすむとき、いつも窓からぼんや  
り白く見えていたでしょう。あそこですよ。  
ね、きれいでしよう、あんなに光っていま  
す。」

泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を  
見ました。青年は教えるようにそつと姉弟に  
また云いました。

「わたしたちはもうなんにもかなしいことな  
いのです。わたしたちはこんないいとこを旅  
して、じき神さまのとこへ行きます。そこな  
らもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な  
人たちがいっぱいいます。そしてわたしたちの  
代りにボートへ乗れた人たちは、きつとみん  
な助けられて、心配して待つているめいめい  
のお父さんやお母さんや自分のお家へやら行  
くのです。さあ、もうじきですから元氣を出

しておもしろくうたつて行きましょう。」青年  
は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みん  
なを慰めながら、自分もだんだん顔いろが  
かやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらつしやつたので  
すか。どうなすつたのですか。」さっきの燈台  
看守がやつと少しわかつたように青年にたず  
ねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、冰山にぶつつかつて船が沈みまして  
ね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用  
で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになつた  
のであとから発つたのです。私は大学へはい  
つていて、家庭教師にやとわれていたのです。  
ところがちょうど二十二日目、今日か昨日のあ  
たりです、船が冰山にぶつつかつて一べんに  
傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこ  
かぼんやりありましたが、霧が非常に深かつ  
たのです。ところがボートは左舷の方半分は  
もうだめになっていましたから、とてもみん

なは乗り切らないのです。もうそのうちに船は沈みますし、私は必死となって、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを聞いてそして子供たちのために祈って呉れました。けれどもそこからポートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しつける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたが前にいる子供らを押しつけようと思いました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりですよってぜひとも助けてあげようと思いましたが、けれどもどうして見ているとそれができないのです。子どもらばかりポートの中へはな

してやってお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじっとこらえてますすぐに立っているなどとてももう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟してこの人たち二人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうとかたまつて船の沈むのを待っていました。誰が投げたカライフブイが一つ飛んで来ましたが、たけれども滑ってずうっと向うへ行っていました。私は一生けん命で甲板の格子になったところをはなして、三人それにしっかりとつきました。どこからともなく 番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一べんにそれをうたいました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ちもう渦に入ったと思いががらしつかりこの人たちをだいてそれからぼうつとしたと思つたらもうここへ来ていたのです。この方たちの

お母さんは一昨年没くられました。ええポートはきつと助かったにちがひありません、何せよほど熟練な水夫たちが漕いですばやく船からはなれていましたから。」  
そこらから小さいのりの声が聞えジヨバン二もカムパネルラもいままで忘れていたいろいろのことをぼんやり思い出して眼が熱くなりました。  
（ああ、その大きな海はバシフィックというのではなかったろうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかって、たれかが一生けんめいはたらいている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろう。）  
ジヨバン二は首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。」

燈台守がなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめします。」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉弟はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかつて睡っていました。さっきのあのはだだった足にはいつか白い柔らかな靴をはいていたのです。

「ここここ」と汽車はぎらびやかな燐光の川の岸を進みました。向うの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のようでした。百も千もの大小さまざまの三角標、その大きなものの上には赤い点点をうった測量旗も見え、野

原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集ってぼおっと青白い霧のよう、そこからかまたはもっと向うからかときどきさまざまの形のぼんやりした狼煙のようなものが、かわるがわるきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのです。じつにそのすきとおった奇麗な風は、ばらの匂でいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしょう。」向うの席の燈台守がいつか黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないように両手で膝の上にかかえていました。

「おや、どこから来たのですか。立派ですねえ。ここではこんな苹果ができるのですか。」青年はほんとうにびっくりしたらしく燈台守の両手にかかえられた一もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめていました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあお

とり下さい。」

青年は一つとってジョバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向うの坊ちゃんがた。いかがですか。おとり下さい。」

ジョバンニは坊ちゃんといわれたのです。ししやくにさわってだまっていましたがかムパネルは

「ありがとう、」と云いました。すると青年は自分でとって一つずつ二人に送ってよこしましたのでジョバンニも立ってありがとうと云いました。

燈台守はやつと両腕があいたのでこんどは自分で一つずつ睡っている姉弟の膝にそつと置きました。

「どうもありがとう。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

青年はつくづく見ながら云いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしませんけれ

ども大ていひとりでにいいものができるよう  
な約束になって居ります。農業だつてそんな  
に骨は折れはしません。たいてい自分の望む  
種子さえ播けばひとりでにどんどんできます  
米だつてパシフィック辺のように穀もないし  
十倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあ  
なたがたのいらつしやる方なら農業はもうあ  
りません。苹果だつてお菓子だつてかすが少  
しもありませんからみんなそのひとそのひと  
によつてちがつたわずかのいいかおりになつ  
て毛あなからちらけてしまうのです。」  
にわかに男の子がぱつちり眼をあいて云い  
ました。

さめちやつた。ああここさっきの汽車のなか  
だねえ。」  
「その苹果がそこにあります。このおじさん  
にいただいたのですよ。」青年が云いました。  
「ありがとうおじさん。おや、かおるねえさ  
んまだねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ね  
えさん。」  
「ごらん、りんごをもらつたよ。おき  
てごらん。」  
姉はわらつて眼をさましまぶしそくに両手  
を眼にあててそれから苹果を見ました。男の  
子はまるでパイを喰べるようにもうそれを喰  
べていました、また折角剥いたそのきれいな  
皮も、くるくるコルク抜きのような形になつ  
て床へ落ちるまでの間にはすうつと、灰いろ  
に光つて蒸発してしまふのでした。

その枝には熟してまっ赤に光る円い実がいっ  
ぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立  
つて、森の中からはオーケストラベルやジロ  
フォンにまじつて何とも云えざきれいな音い  
ろが、とけるように浸みるように風につれて  
流れて来るのでした。  
青年はぞくつとしてからだをふるうように  
しました。  
だまつてその譜を聞いていると、そこらに  
いちめん黄いろやうすい緑の明るい野原が敷  
物かがひろがり、またまっ白な蠟のような露  
が太陽の面を擦めて行くように思われました。  
「まあ、あの鳥。」カムバネルラのとりのの  
かおると呼ばれた女の子が叫びました。  
「からすでない。みんなかささぎだ。」カムバ  
ネルラがまた何気なく叱るように叫びました  
ので、ジヨバンニはまた思はず笑ひ、女の子  
はさまり悪そうにしました。まったく河原の

青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんた  
くさんいっばいに列になってとまってじつと  
川の微光を受けているのです。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛  
がびんと延びてますから。」青年はとりなすよ  
うに云いました。

向うの青い森の中の三角標はすっかり汽車  
の正面にきました。そのとき汽車のずうつと  
うしろの方からあの聞きなれた 番の讚美  
歌のふしが聞えてきました。よほどの人数で  
合唱しているらしいのです。青年はさつと  
顔いろが青さめ、たつて一ぺんそつちへ行き  
そうにしましたが思いかえしてまた座りまし  
た。かおる子はハンケチを顔にあててしま  
いました。ジヨバンニまで何だか鼻が変になり  
ました。けれどもいつともなく誰ともなくそ  
の歌は歌い出されだんだんはつきり強くなり  
ました。思わずジヨバンニもカムパネルラも  
一緒にうたい出したのです。

そして青い橄欖の森が見えない天の川の向  
うにさめざめと光りながらだんだんうしろの  
方へ行つてしまひそこから流れて来るあやし  
い楽器の音ももう汽車のひびきや風の音にす  
り耗らされてずうつとかすかになりました。

「あ孔雀が居るよ。」

「ええたくさん居たわ。」女の子がこたえまし  
た。

ジヨバンニはその小さく小さくなつていま  
はもう一つの緑いろの貝ぼたんのように見え  
る森の上にさつさつと青じろく時々光つてそ  
の孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の  
反射を見ました。

「そうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」

カムパネルラがかおる子に云いました。

「ええ、三十疋ぐらいはたしかに居たわ。ハ  
ーブのように聞えたのはみんな孔雀よ。」女の  
子が答えました。ジヨバンニは俄かに何とも  
云えずかなしい気がして思わず

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで  
行こうよ。」とこわい顔をして云おうとしたく  
らいでした。

川は二つにわかれしました。そのまっくらな  
島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれて  
その上に一人の寛い服を着て赤い帽子をかぶ  
った男が立っていました。そして両手に赤と  
青の旗をもってそれを見上げて信号している  
のです。ジヨバンニが見ている間その人は  
しきりに赤い旗をふっていました。俄かに赤  
旗をおろしてうしろにかくすようにし青い旗  
を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮  
者のように烈しく振りましました。すると空中に  
ざあつと雨のような音がして何かまっくらな  
ものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸  
のように川の向うの方へ飛んで行くのです。  
ジヨバンニは思わず窓からからだを半分出し  
てそつちを見あげました。美しい美しい桔梗  
いろのがらんとした空の下を突に何万という

小さな鳥どもが幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通って行くのでした。

「鳥が飛んで行くな。」ジョバンニが窓の外で云いました。

「どら。」カムバネルラもそれを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気のようにふりうごかしました。するとびたつと鳥の群は通らなくなりそれと同時にびしゃあんという潰れたような音が川下の方で起つてそれからしばらくしいとしました。と思つたらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふつて叫んでいたのです。「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはつきり聞えました。それといっしょにまた幾万という鳥の群がそれをまっすぐにかけたのです。二人の顔を出しているまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい頬をかがやかせながらそれを仰ぎま

した。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどジョバンニは生意気ないやだいたいと思ひながらだまって口をむすんでそれを見あげていました。女の子は小さくほつと息をしてだまって席へ戻りました。カムバネルラが気の毒そうに窓から顔を引つ込めて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしょうか。」女の子がそつとカムバネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きつとどこからかのろしがあるためでしょう。」カムバネルラが少しおぼつかないやうに答えました。そして車の中はいいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引つ込めたかったですけれども明るいこへ顔を出すのがつらかったのだからだまってこらえてそのまま立つて口笛を吹

いていました。

（どうして僕はこんなにかなしのいだろう。僕はもつとこころもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずつと向うにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにせずかであつめたい。僕はあれをよく見てこころもちをしずめるんだ。）ジョバンニは熱つて痛いあたまを両手で押えるようにしてそつちの方を見ました。（ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムバネルラだつてあんな女の子とおもしろうに談しているし僕はほんとうにつらいなあ。）ジョバンニの眼はまた泪でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行つたやうにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通るようになりました。向う岸もまた

黒い川の崖が川の下流に下るにしたがってだんだん高くなって行くのでした。そしてちらっと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう

美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増して来てもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバンニが窓から顔を引っ込めて向う側の窓を見ましたときは美しいその野原の地平線のはてまでその大きなとうもろこしの木がほとんどいちめん植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸った金剛石のように露がいつぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのです。カムバネルラが「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに云いましたけれどもジョバンニはどうしても気がなおりませんでしたからただぶつきり棒

に野原を見たまま「そうだろう。」と答えました。そのとき汽車はだんだんしずかになっていくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示しその振子は風もなくなり汽車もう「かすしずかなしずかな野原のなかにカチツカチツと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてまったくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。「新世界交響楽だわ。」姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそつと云いました。全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰もみんなやさしい夢を見ているのでした。

（こんなしずかないところで僕はどうしてもつと愉快になれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムバネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょ

に汽車に乗っているがまるであんな女の子とばかり談しているんだもの。僕はほんとうにつらい。）ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見つめていました。すきとおった硝子のような笛が鳴って汽車はしずかに動き出し、カムバネルラもさびしそくに星めぐりの口笛を吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰かとしよらしい人のいま眼がさめたという風ではきはぎ談している声がしました。

「とうもろこしだつて棒で二尺も孔をあけておいてそこへ播かないと生えないんです。」

「そうですか。川まではよほどありますよかねえ、」

「ええええ河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峡谷になっているんです。」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかつたろうか、ジョバンニは思わずそう思いました。カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだ苹果のような顔いろをして、ジョバンニの見る方を見ているのです。突然とうもろこしがなくなつて大きな黒い野原がいっぱいひらけました。新世界交響楽はいよいよはつきり地平線のはてから湧きそのまっ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番えて一目散に汽車を追つて来るのです。「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。」「あら、あら。」

「いいえ、汽車を追つてゐるんじゃないんですよ。狐をするか踊るかしてゐるんですよ。」青年はいまどこに居るか忘れたという風にポケットに手を入れて立ちながら云いました。まったくインデアンは半分は踊つてゐるようでした。第一かけるにしても足のふみようがもつと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根は前の方へ倒れるようになりインデアンはびたつと立ちどまつてすばやく弓を空にひきました。そこから一羽の鶴がふらふらと落ちて来てまた走り出したインディアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそうに立つてわらいました。そしてその鶴をもつてこつちを見ている影ももうどんどん小さく速くなり電しんばしらの褥子がきらつきらと続いて二つばかり光つてまたとうもろこしの林になつてしまいました。こつち側の窓を見ま

すと汽車はほんとうに高い高い崖の上を走つていてその谷の底には川がやっぱり幅ひろく明るく流れていたので。 「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一べんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜があるもんですから汽車は決して向うからこつちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなつたでしょう。」さっきの老人らしい声が云いました。 どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかかるときは川が明るく下のぞけたのです。ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなって来ました。汽車が小さな小屋の前を通過つてその前にしょんぼりひとりの子供が立つてこつちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。 どんどんどんどん汽車は走つて行きました。



室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛にしっかりとしがみついていました。ジヨバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいまままでよほど激しく流れて来たらしくときどきちちらちら光ってながれているのでした。うすあかい河原なでしこの花がちちこち咲いていました。汽車はようやく落ちて向うとこちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたつていました。

「あれ何の旗だろうね。」ジヨバンニがやっどものを云いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ。」

「ああ。」

「橋を架けるとこじゃないんでしょうか。」女の子が云いました。

「あああれ工兵の旗だねえ。架橋演習をして

るんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がきらりと光って柱のように高くはねあがりどおと烈しい音がしました。

「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりました。

その柱のようになった水は見えなくなり大きな鮭や鱒がきらきらと白く腹を光らせて空中に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジヨバンニはもうはねあがりたくらい気持が軽くなって云いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やんかがまるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もいるんでしょうか。」女の子が

談につり込まれて云いました。

「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだから小さいの見えなかったねえ。」ジヨバンニはもうすっかり機嫌が直って面白そうにわらって女の子に答えました。

「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外をさして叫びました。

右手の低い丘の上に小さな水晶でもこさえたような二つのお宮がならんで立っていました。

「双子のお星さまのお宮って何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんから聞いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならんでいるからきつとそうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したっての。」

「ぼくも知ってらい。双子のお星さまが野原へ遊びにでてからすと喧嘩したんだろう。」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おっかさんお話をすったわ、……」

「それから彗星がギーギーギーギーフーって云って来たねえ。」

「いやだわたあちゃんそうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」

「するとあすこにいま笛を吹いて居るんだらうか。」

「いま海へ行つてらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがつていらっしやったのよ。」

「そつそつ。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう。」

川の向う岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまっ黒にすかし出され見えない天の川の波もとどきちちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に大きなまっ赤な火が燃されその黒いけむりは高く枯

梗いろのつめたそうな天をも焦がしそつでした。ルビーよりも赤くすぎとおりリチウムよりもつつくしく酔つたようになつてその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だらう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう。」ジヨバンニが云いました。

「蠅の火だな。」カムパネルラが又地図と首つ引きして答えました。

「あら、蠅の火のことならあたし知つてわ。」

「蠅の火つてなんだい。」ジヨバンニがききました。

「蠅がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるつてあたし何べんもお父さんから聴いたわ。」

「蠅つて、虫だらう。」

「ええ、蠅は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蠅いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで螫されると死ぬつて先生が云つたよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯う云つたのよ。むかしのバルドラの野原に一びきの蠅がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですつて。するとある日いたちに見附かつて食べられそうになつたんですつて。さそりは一生けん命逃げて遁げたけどどうとういたちに押えられそうになつたわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云つてお祈りしたというの、

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとつたかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに

一生けん命にげた。それでもどうとうこんな  
なつてしまった。ああなんにもあてになら  
ない。どうしてわたしはわたしのからだをだ  
まつていたちに呉れてやらなかつたらう。そ  
したら私たちも一日生きのびたらうに。どう  
か神さま。私の心をこらんなさい。こんな  
むなしく命をすてずどうかこの次にはまこと  
のみんなの幸のために私のからだをおつか  
下さい。つて云つたというの。そしたらいつ  
か蠅はじぶんのからだがまつ赤なうつくしい  
火になつて燃えてよるのやみを照らしてい  
るのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さ  
ん仰つたわ。ほんとうにあの火それだわ。」  
「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちよ  
うどさそりの形にならんでいるよ。」

ほんとうにそのまつ赤なうつくしいさそりの  
火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。  
その火がだんだんうしろの方になるにつれ  
てみんなは何とも云えずにぎやかなささま  
の楽の音や草花の匂のようなもの口笛や人々  
のざわざわ云う声やらを聞きました。それは  
もうじぎちかくに町か何かがあつてそこに  
祭でもあるというような気がするのです。  
「ケンタウル露をふらせ。」いきなりいまま  
で睡っていたジヨバンニのとなりの男の子が向  
うの窓を見ながら叫んでいました。  
ああそこにはクリスマストリイのようにま  
つ青な唐檜かもみの木がたつてその中には  
くさんのたくさんの豆電燈がまるで千の螢で  
も集つたようについていました。

「ボール投げなら僕決してはずさない。」  
男の子が大威張りで云いました。  
「もうじぎサウザンクロスです。おりる支度  
をして下さい。」青年がみんなに云いました。  
「僕も少し汽車へ乗つてるんだよ。」男の子  
が云いました。カムパネルラのとなりの女の  
子はそわそわ立つて支度をはじめましたけれ  
どもやっぱりジヨバンニたちとわかれたくな  
いようなようすでした。  
「ここでおりにけあいけないのです。」青年は  
きちつと口を結んで男の子を見おろしながら  
云いました。  
「厭だ。僕もう少し汽車へ乗つてから行く  
んだい。」  
ジヨバンニがこらえ兼ねて云いました。  
「僕たちと一緒に乗つて行こう。僕たちどこ  
までだつて行ける切符持つてるんだ。」  
「だけどあたしたちもうここで降りなけあ  
けないのよ。こゝ天上へ行くところなんだか

ら。」女の子がさびしそくに云いました。

「天上へなんか行かなくていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもっといいところをこさえなけあいいないって僕の先生が云ったよ。」

「だってお母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだわ。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」

青年は笑いながら云いました。

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんとうのたつた一人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたつた一人です。」

「ああ、そんなんでなしにたつたひとりのほ

んとうのほんとうの神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつましく両手を組みました。女の子もちょうどその通りにしました。みんな

ほんとうに別れが惜しそいでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

ああそのときでした。見えない天の川のうつつと川下に青や橙やもうあらゆる光でちりばめられた十字架がまるで一本の木という風に川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲がまるい環になって後光のようにかかっているのです。汽車の中がまるでさわさわしました。みんなあの北の十字のときのよ

うにまっすぐに立ってお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜に飛びついたときのようなよろこびの声や何とも云いようない深いつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの華果の肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞っているのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラツパの声をききました。そしてたぐさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかにほんとうとう十字架のちようども向いに行つてすつかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出し

ました。

「じゃさよなら。」女の子がふりかえって二人に云いました。

「さよなら。」ジヨバンニはまるで泣き出したのをこらえて怒ったようにぶつきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそうに眼を大きくしても一度こつちをふりかえってそれからあともうだまって出て行ってしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまいました。俄かにならんとしてさびしくなり風がいつばいに吹き込みました。

そして見ているとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの神々しい白いきもの人が手をのびしてこつちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ううちに銀いろの霧が川下の方からすうっと流れ

て来てもうそつちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのときすうっと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の一行についた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちよとど挨拶でもするようにぼかっと消え二人が過ぎて行くときまた点くのでした。

ふりかえって見るとさっきの十字架はすっかり小さくなってしまいいほんとうにもうそのまま胸にも吊されそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚にまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行ったのかぼんやりして見分

けられませんでした。

ジヨバンニはああと深く息しました。

「カムバネルラ、また僕たち二人きりになつたねえ、どこまでもどこまでも一緒に行く。」僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまわない。」

「うん。僕だってそうだ。」カムバネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジヨバンニが云いました。

「僕わからない。」カムバネルラがぼんやり云いました。

「僕たちすっかりやろうねえ。」ジヨバンニが胸いつばい新しい力が湧くようにふうと息をしながら云いました。

「あ、あすこ石炭袋だよ。その孔だよ。」カムバネルラが少しそつちを避けるようにしながら天の川のひとつこを指さしました。ジ

ヨバンニはそつちを見てまるでぎくっとしてしまいました。天の川のひとこに大きなまっくらな孔がどほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんと痛むのです。ジョバンニが云いました。

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集つてゐるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそつちを見ましたけれどもそ

こはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云つたように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてぼんやりそつちを見ていましたら向うの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニが斯う云いながらふりかえつて見ましたらそのいままでカムパネルラの座つていた席にもうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかりひかっています。ジョバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりましました。そして誰にも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっばいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっばい泣きだしました。もうそこらが一べんにまっくらになったように思いました。

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘

の草の中につかれてねむっていたのです。胸は何だかおかしく熱り顔にはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はずつかりさっきの通りに下でたくさんの灯を綴つてはいましたがその光はなんだかさつきよりは熱したという風でした。そしてたつたいま夢であるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかかりまっ黒な南の地平線の上では殊にけむつたようになってその右には蠟座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変わつてもいないようでした。

ジョバンニは一さんに丘を走つて下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっばいに思いだされたのです。どんだん黒い松の林の中を走つてそれからほの白い牧場の柵をまわつてさっきの入

口から暗い牛舎の前へ来た来ました。そこには誰かがいま帰ったらしくさつきなかつた一つの車が何かの樽を二つ乗つけて置いてありました。

「今晚は」ジヨバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかつたのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行って一本の牛乳瓶をもって来てジヨバンニに渡しながまた云いました。

「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうっかりしてこうしの棚をあけて置いたもんですから大将早速親牛のところへ行つて半分ばかり呑んでしましましてね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいて行きます。」

「ええ、どうも済みませんでした。」

「いいえ。」

ジヨバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもって牧場の欄を出ました。

そしてしばらく木のある町を通つて大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になつてその右手の方、通るのはずれにさつきカムバネルラたちのあかりを流しに行つた川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になつた町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつぱいなのでした。

ジヨバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたように思いました。そしていきなり近くの人たちへ

「何かあつたんですか。」と叫ぶようにききま

した。

「「子どもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは一斉にジヨバンニの方を見ました。ジヨバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱいいて河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出てきました。」

ジヨバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水際に沿つてたくさんのあかりがせわしくのぼつたり下つたりしていました。向う岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもう烏瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにじずかに流れていたのです。

河原のいちばん下流の方へ州のようになつて出たところに人の集りがくつきりまっ黒に立っていました。ジヨバンニはどんどんそつちへ走りました。するとジヨバンニはいきな

りさつきカムバネルラといっしよだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄ってきました。

「ジョバンニ、カムバネルラが川へはいったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったろう。するとカムバネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムバネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムバネルラのお父さんも来た。けれども見附からないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行

きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖ったあごをしたカムバネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

みんなもじっと河を見ていました。誰も一言も物を云う人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えるのでした。

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのままのそらのように見えました。

ジョバンニはそのカムバネルラはもうあの銀河のはずれにしかいないというような気がしてしかなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムバネルラが出て来るか或いはカムバネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がして仕方ないらしいのでした。けれども俄かにカムバネルラのお父さんがぎつぱり云いました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムバネルラの行った方を知っています。ぼくはカムバネルラといっしよに歩いていたのですと云おうとしましたがもうどがつかまって何とも云えませんでした。すると博士はジョバンニが挨拶に来たとでも思ったのですか、しばらくしげしげジョバン



二を見ていました

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晩はありがとう。」と町ねいに云いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったまままたききました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な便りがあつたんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっばいにうつった方へじっと眼を送りました。

ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっばいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さ

んの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りました。



# 銀河鉄道の夜

平成 24 年 7 月 12 日 初版第一刷発行

著者 宮沢賢治

発行者 谷村勇輔

発行所 ブイツーソリューション

〒 466-0848 名古屋市昭和区長戸町 4-40

TEL 052-799-7391 | FAX 052-799-7984

発売元 星雲社

〒 112-0012 東京都文京区大塚 3-21-10

TEL 03-3947-1021 | FAX 03-3947-1617

印刷所 印刷所は印刷部数で変わります

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替えいたします。

ブイツーソリューション宛にお送りください。

定価はカバーに表示してあります。

©KenjiMiyazawa2012 Printed in Japan ISBN0-000-00000-0